

Title	血脇守之助伝
Journal	, (): -394
URL	http://hdl.handle.net/10130/917
Right	

第十九章 鎮魂

野口英世アクラに死す

「野口英世博士は一九二八年五月二十一日月曜日西アフリカ、英領ゴールドコースト、アクラにおいて逝去せり」
ロックフェラー医学研究所発表。

計報は直ちに全世界を馳せ巡り、折から満鮮旅行の途中の木下長官邸で一夜を明かした守之助宛にウナ電が到着したのは昭和三年五月二十三日午後三時であった。

「ノグチハクシアフリカニテシス オクムラ」高津式から電報を受け取った守之助は、一瞬顔色を曇らせ、瞳に潤みを浮べながら、

「そうか……。あの人は長くはないと思っていた」といいながら顔をそらして多くを語ろうとしなかった。満鮮旅行を切りあげて帰京するわけにもいかず、

奥村宛に、

「テハイヨロシクタノム チワキ」万事、奥村鶴吉に委託するより方法はなかった。

六月二十九日、東京では政、官界、医界の重鎮が発起人となった追悼会が工業倶楽部で行なわれ、会衆は八百名を



工業倶楽部で行なわれた野口英世博士追悼会（昭和3年6月29日）

越えた。また東京歯科医学専門学校の学生会では八月三日追悼会を行なった。守之助は、「野口博士を悼む」と題し、その思い出を次のように述べている。

『博士野口英世君、君が世を去られた時何も知らぬ私は満鮮旅行の途上にありました。悲しき君の訃報をば五月二十三日午後三時旅順において受け取りました時は夢かとはかり驚きかつ悲しみました。君が濟世捧身の生涯は遂に五十三歳を一期として終わったのかと思うと今更に寂しさと限りなき痛々しさが胸に充ち溢れるのです。ここに永い間の交わりを重ねた間柄として私に君の生涯を回顧させていただきたいと思えます。』

第一に君は非凡の天才でした。君が二十一歳の昔、明治二十九年十一月三日から三十三年十二月まで私と同居した時代においてエリザ・ケッペン夫人についてドイツ語を学ぶこと僅か三カ月でもうドイツ語はこれで卒業だと壮語したことを君は覚えていますか、実際君は辞書をひもどいて一語を再び繰り返すことをしなかった。君が眠る時は午前三時、起きるのは午前六時と定まっていた。更に驚くべきは君が渡米直後、

ペン大学図書館に閉じ籠り水とパンで飢えをしのぎつつ遂に二百五十頁の文献抄録を完成してフレックスナー教授を感ぜせしめたことも今となっては君の快き微笑の種でありましょう。君が三十五歳の折、学位請求のため私の手許に送って来たのは論文九十三篇と外に「毒蛇及蛇毒」ならびに「梅毒の血清診断」の二大著書でした。学位論文として未だかつてかような大部なものがあつたでしょうか、ああ君が三十九歳にしてロックフェラー医学研究所のメンバーたりしまでの経歴性行のみを考えただけでも一として非凡の天才たる表徴ならざるものはありません。しかしながらその反面において君は極めて根気強き人、徹底的努力の人でした。幼少の時から夜は三時間位しか眠らなかつたというが常に緊張している人であつたと覚えていきます。愈々之をやるとなると一心不乱に何年かかろうとその道中はどうあろうとも構わぬ如何なる苦難をもあえて避けないというのが君の本領である。しかも常に人に一步の譲りをなす徳義を忘れませんでした。非凡の天才がかくその威力を發揮したのも蓋し偶然ではないと思ふのであります。

次に君は誠に親孝行でした。これは君が小さい時から辛苦艱難かんなんをなめ尽くして来たように君の母もまた非常な苦しみの中に君を育てた。これが君の脳裏に深く印刻して一生涯忘れられなかつたと思ふのであります。遠く国を離れて十五年、なつかしの母親見たしと思ふ矢先に君の親友石塚三郎君が老いやつれた君の母を写真に撮つて送りました。それを見た君は矢も楯もたまらなくなり帰りたくなりました。しかし金に恵まれなかつた君は旅費の点で当惑しました。「日本に帰る母に会いたし金送れ」という有名な電報を星一君に打つて金をつかむや否や飛ぶように帰つて来ました。

大正四年の九月五日であります。しかも帰るとすぐに故郷に母を訪ね、さらに母を伴つて伊勢参宮から関西見物に出かけました。その時、小林夫妻、私も同行しましたが、其の道中で君は母をどんなに大切にしたことでしょう。その十月十日佐多博士の招待で箕面のさる料亭に昼食をした時に、君は母のために箸を執らんばかりに一々料理を説明

しながら我を忘れてたべさせていました。君の前には当時関西切つての有名な美人がいました。しかし君の眼中、既に美人なくただ母に食べさせたいの一念に猛進している有様はそぞろ涙ぐまじき光景として今眼前に髣髴きうふつとしてるのであります。

更に思えば、君は誠に恩誼に厚かりし人でありました。恩と借財は返し難しと申しますが、君はこれを深く印象して君の家族三代に及んで厚き恩誼を蒙れる小林先生はもとより十八歳より深きお世話を受けた渡部先生に対して共々に一生の内に何とか致したいという気持ちに充ち満ちていたと思います。特にフレックスナー先生に対する恩義は、君が最も早く感じておったところでありまして、年も若く未成品であった日本の学生を引き上げて、親切に世話をし、その天才を発揮せしめたことは何と云っても君が学業の基礎であります。それ故に君はたとえ高給をもって招聘されても、遂に終始フレックスナー先生の膝下を去らなかつたのでありまして、米国においても何処においても容易に見る能わざる人生美談であります。

ここに私の私交上のことを申しますならば、大正十一年私が欧米巡遊の途次、米国に着くと君は既に私が滞米中のプログラムを作つて待つていて下さつた。爾來、各地を巡つて最後にシカゴで別れるまで一カ月半の間、私につき通してありました。地方にいても研究所からは毎日電報をもつて刻々研究成績を報告してくる。更に電報で指図する。これは君として大なる苦痛であつたと思ひます。容易ならぬことであります。お別れする時私はその恩誼の厚いのに感じまして「時に野口さん、あなたの若い時多少お世話したが今回はあなたから大したお世話になりました。昔の世話はこれで取り引きなしに願ひます」と申しました処、君は涙を流して立腹しました。「先生としたことが何と云う情けない御言葉です。恩の取り引きとは何事です。一生涯忘れることなき恩誼を僅か一度のお供が何でしょう。私はアメリカに在ること既に二十年になります、清作の心はあくまで日本人です。第一私を呼ぶのに野口さんとは

何ですか、清作とお呼び捨て下さるが当然です。せめて野口君と呼ばれる事は我慢しますが、野口さんは返上致します」と泣きながらの立腹でありました。私はその誠意に感じて前言を取り消し、さて別れに臨んで「君は急ぐと命は永くないよ」と君を戒しめ君もまた「服膺ふくようします」と言葉を交わしたがそれが今となっては最後の別れでありました。其の姿、其の声は今なお私の目に耳にまざまざと甦ります。しかし其の時のかりそめの言葉が今や箴とがをなして君が西部アフリカの而も赤道直下に斃たふれようとは、誠に情けなき限り辛きことの限りであるが、しかし君の五十二年の数奇なる生涯は苦しくとも辛くとも一度立てた目的は敢然これを貫徹し世界の大家としてしかも学問の犠牲として一身を献げたとすれば君も亦瞑すべきであります。

ああ野口英世君、君の肉体は滅びたりと雖も君の不抜なる魂は不滅の生命として人類の上に永遠の光明を与えるであります。願わくば聞く能わざる君の声と見る能わざる君の光によって多くの人々が指導せられ鼓吹せられ奮起して此の世に貢獻せられん事を祈念して止みませぬ』

野口は渡米後二十八年、研究上のこと、生活上のこと、折にふれて感じたことを詳細にしたため守之助に送り続けていた。渡米前からのことも含めれば守之助にとっては思い出の宝庫であり、まだまだ言い足りぬことが多かったに違いないがこの追悼は守之助の野口に対する思いやりが随所に見られ、聴衆に深い感銘を与えた。この守之助と野口との交情を含めて、金杉英五郎は野口その人の一生を次のように言い当てている。

「生来、困苦するものは多い。精力絶倫の人も少なくない。非凡の天才も少なくない。しかし、困苦した故に珠玉となるか、精力絶倫の故に成功するか、非凡の天才なれば名声を博するかというところは必ずしもそうではなくて極めて稀である。その成否は遭遇の如何に係ることが多大である。遭遇には三種類あって、恩遇、奇遇、知遇がこれである。困苦に耐えても恩遇なければ世に出ることができず、天才といえども奇遇なければ、功績を残すことがで



「高雅学風徹千古」 ニューヨークの野口博士から
寄贈された（大正13年）、野口英世追悼会にて

きず、精力絶倫といえども知遇なければ功を遂げることができない。血脇等の恩遇がなければ田舎貧民にすぎず、フレックスナー等の知遇がなければ蔽医にすぎず、マドセンの奇遇がなければ一米国ドクトルに止っていたであろう。こう考えると遭遇を軽視することはできない」（東京歯科医学専門学校学生追悼会にて）

それから五十年、本学には野口英世の遺墨「高雅学風徹千古」が額に納めて掲げられ後進の進む道を示している。学術の府の目標として関東大震災の廃墟から守之助を陣頭に立ち上げる教職員学生を勇気づけるために書かれたも

ので、大正十三年守屋賢吾日本コ
ック社代表に托して本校へ送り届
けられたものである。

高山紀齋をしのぶ

昭和八年二月五日、高山紀齋は八十三歳で逝去した。

東京齒科医学専門学校は、二月十五日、本館中央ホールで高山紀齋の校葬を行なった。葬儀は仏式で午後一時から開始され、宮家を始め、各方面から寄せられた供物、花環が正面に並び故人生前の遺徳を偲ばせた。奥村学監による故人の経歴が披露されたあと、守之助は靈前に次の弔辞を捧げた。

「謹んで故正六位勲五等高山紀齋先生の尊靈に告げ奉る。願れば先生が高山齒科医学院を開設せられたるは明治二十三年一月にして今を距る実に四十三年の昔なりき。同学院十年の拮据経営は其劳苦常人の知るべからざる処、其間



高山紀齋還暦の頃

薰育養成せられたるもの其の數に於て多からずと雖も之によりて克く全国に近世齒科医術を拡布し、本邦齒科医育の濫觴らんしょうをなせり。之れ蓋し先生達識の然らしめる所以にして其功勞筆舌に尽し難し。故に後進悉く之を感謝して先生の老境つが悉つがなからん事を祈れり。而も今や盜焉こうえんとして長逝せられる。痛惜何物か之に如かん、嗚呼悲しい哉。然れども一たび学院より流れ出でたる力は斯道に於て常に一脈の生命となり權威となり之を外にしては本邦斯学の精華を発揚し之を内にしては遂に本校の今日あるを致せり。先生亦以て

瞑すべきかな。

東京齒科医学専門学校は茲に先生を瘞つに校葬の礼を以て謹んで哀悼の至誠を表す。願くば尊靈永しへに安らげくゝるまし給せ」

紀齋は幼名を弥太郎といい嘉永三年十二月十二日備前岡山に生まれた。幼児のときから藩校で文武の道を修業した。慶応三年十八歳のときに従軍し、官軍として東北鎮撫の役にも加わっているが、その頃は守之助の実父と敵味方に別れて戦っていたことになる。その後再び岡山で勉学の道に勤しんだが、明治二年十一月から藩命によって慶応義塾に留学した。それから約二年後の明治五年一月、意を決して渡米留学し、当初は政治方面の勉強をするつもりだったが、齒の疾患でデイー・バンデンバーグ博士の治療をうけ、その治療法に感心したのが契機となって遂に志望を更した。バンデンバーグは、サンフランシスコの一流の開業医で人物、技術ともに優れていたという。彼は紀齋を寄寓させ、好意的に指導し、紀齋もまたそれに応えて励んだので、米国での齒科医術開業試験に合格することができた。そして明治十一年三月在米六年の成果を携えて帰国した。翌四月銀座三丁目十七番地で開業し、以後大正十一年まで四十五年間にわたり診療に従事した。しかしながら紀齋は一開業医に止どまらず、多方面にわたる才能に恵まれ、趣味教養も極めて豊かであったから、専門分野を中心に広範囲な社会活動の足跡を残している。

明治十四年五月には在米時代の知識をもとに有名な保齒新論を編纂し、その後も矢継早に歯牙組織解剖図、歯牙藥物摘要、歯牙養生法、衛生保齒問答、第五対脳神経解剖編、齒科手術論、齒科汎論および実用齒科器械学、齒科冶金学、齒科薬物学などを編述し、そのほか、全二十四巻に及ぶ高山齒科医学院講義録を刊行して、後進の勉学に指針を与えた。

一方、明治十七年九月から明治三十三年四月まで、医術開業試験委員を務めた。歯科開業試験は明治十七年四月から第一回が東京で行なわれていたが、九月からは高山紀齋が担当した。そして試験委員をしたことが動機となって、歯科医育の必要性を痛感し、明治二十三年一月高山歯科医学院創立として結実した。

明治二十六年六月には、時の内閣から臨時博覧会評議員として米国出張を命じられ、シカゴで開催された第二回万国歯科医学会議に参列して名誉会頭に推薦され、一場の講演を行ない参会者の拍手を浴びた。この出張にあたって、高山歯科医学院の過去および現在の状況を「高山紀齋小伝」と題して英文パンフレットにまとめ、これを守之助が宮森と共に苦心して編纂したことは、すでに述べた通りで、守之助と高山をより強く結びつける機縁となった。またその四年後にパリで開かれた第三回万国歯科医学会議でも高山紀齋は名誉会頭に推されている。

そのほか、明治二十八年大日本私立衛生医学科審事官、明治二十三年（第三回）、明治二十八年（第四回）内国博覧会審査官を務め、明治三十三年十月、日本赤十字社特別会員となっている。

さらに、開業の名声頓に上がるに伴い明治二十年七月から待医局勤務、四十一年からは待医療勤務を命ぜられ、皇后、東宮、宮家の方々の拝診にあたった。

歯科医政面でも明治三十五年一月には衆望を担って日本歯科医学会会長となり、翌三十六年一旦解散したが、明治三十六年十一月二十七日大日本歯科医学会（これが後に日本連合歯科医学会、その後医師会を経て、今日の日本歯科医師会となる）が組織された際、再び会長に推され、三十九年十二月辞任するまで創世期の歯科医学会の要となった。

その後は、公的な医政面からは引退に近い形をとっていたが、元老的立場で、守之助らの活動を見守っていた。

ところで高山紀齋の生活ぶりは華族様なみに優雅を極め、外出は御者付馬車で行なわれた。芝区伊皿子町の高山邸の隣家は政府高官の邸宅で、あるときなど両方の馬車が衝突事故を起こしたことさえある。万事殿様風であったか

ら、学院の学生などは隣接の学校から、そう気易く院長の邸宅を訪ねることはできなかつた。

また、歯科医師の会合などに顔出しすることも少なく、自ら進んで会務運営の衝に当たることにはなかつた。歯科医会への入会も周囲の人の懇請によつてはじめて実現するという風であつた。

このように高山紀斎は歯科界で高踏泥にまみれずという態度を矜持していたが、同時にそれ故にこそ尊崇の的となる一面を備えていた。